

目次

日中間での問いと現在—第25回大会 とシンポジウム(1)を振り返って1	第34回 総会報告.....8
自由報告(1) A.....2	2013年度理事会報告(1).....11
自由報告(1) B.....3	2013年度理事会報告(2).....11
自由報告(1) C.....4	第4回若手萌芽研究会 報告.....12
自由報告(2) D (科研セッション)5	在外会員レポート.....13
自由報告(2) E.....6	新入会員の声.....15
大会シンポジウム(2).....7	会員の著書紹介.....16
	陸学芸先生を悼む.....17
	事務局からのお知らせ.....18

■日中間での問いの現在

—第25回大会とシンポジウム(1)
を振り返って—

西原和久 (成城大学)

2013年6月1日(土)と2日(日)の2日間にわたり、日中社会学会第25回大会が成城大学で開催された。開催校代表として、この年次大会を簡潔に振り返ってみたい。

大会初日は、理事会の後、午後1時から開会式が行われた。ここでは、成城大学社会イノベーション学部の学部長・古川良治教授から挨拶をいただいた。古川教授は社会心理学が専門だが、挨拶のなかでは日中関係の現在を見据えた形で日中社会学会に関する期待が述べられた。続いて、記念講演がなされ、この春まで成城大学に在籍していた日本社会学会前会長の矢澤修次郎教授(一橋大学名誉教授・成城大学名誉教授)が「文明の社会学からみた中国と日本」と題して講演して下さった。その要諦は、東アジア共同体に関する議論は、歴史的、文化的、文明論的になさ

れる必要があり、日本にもある一種の超越論的要素もふまえて、社会発展の新たな軌道を模索する文明論的な転換がいま社会学にも求められている、というものだと了解した。

記念講演の後には、開催校がコーディネートしたシンポジウム(1)が開催された。テーマは「日中交流の現在—東アジア共同体の可能性を問う」であった。第1報告は黒田由彦氏(名古屋大学)「東アジアにおけるグローバル化と日中関係」で、これまでの日中関係を簡潔に辿りつつ日中関係の今後への問いを提起された。グローバルな状況のなかで日中関係も考えなければならないとの主張だと理解した。第2報告の中村則弘氏(愛媛大学)「『小伝統』を基礎とした東アジア共同体へ向けて—アジアからのパラダイム転換—」で、地方や民間の担い手によって作り上げられてきた「小伝統」の可能性を重視しながら形成するトランスナショナルな共同体・協力組織という方向性が提示された。第3報告は陳立行氏(関西学院大学)「儒教の価値から見た東アジア共同体形成の困難」

で、東アジア共同体構築のためには、共同体内部で権威と仁徳をもち共同体をリードする役割が重要だと主張された、と了解した。この報告に対して、本大会において新会長に選出された首藤明和氏(兵庫教育大学)と『中国の市民社会』の著者でもある李妍焱氏(駒澤大学)のお二人がコメントを述べ、活発な討議がなされた。実際に日中の架け橋的な仕事を遂行しているこの二人のコメンテーターの発言もふまえて、本シンポジウムにおいても、日中関係・東アジア情勢の現在をふまえつつも、いわば草の根の交流をいっそう活性化していくことが重要だと再認識させられたといえよう。(なお、本大会の第一日目は、その後、総会と懇親会がなされて、無事終了したことを付け加えておく。)

さて、大会第二日目は、自由報告とシンポジウム(2)がおこなわれた。自由報告は5つのセッションからなり、合計で15報告がなされた。内容を筆者なりに分類すれば、①ナショナル・ローカルなレベルでの中国に関する報告、とくにその経済・政治・社会(家族・コミュニティなど)・文化(教育・スポーツなど)などと、②トランスナショナル・リージョナルなレベルでの日中間あるいは東アジアに関する報告(国際結婚・満鉄・韓国・台湾など)とに大別できるであろう。①の報告が10本、②が4本である。多くが「ナショナルな枠」内での議論で、トランスナショナルな②の視点が少ないことは、若手の日本側報告者が少ないこととともに、今後の課題であろう。

二日目の午後は、シンポジウム(2)「Chinesenessの『発明』」であった。この点に関しては、担当者から総括がなされるであろうから、ここでの立ち入った言及は控えておく。グローバル化時代に中国のプレゼンスが増大するなかで「チャイニーズネス」は

十分に検討に値する課題であることは間違いない、とだけここでは述べておきたい。

こうして二つ目のシンポジウムを終えて、日中社会学会の第25回大会は、すべての報告・討議を終えた。最後の閉会式で全日程が終了したころには夕暮れが迫っていた。

香港からの2名の報告者を含め遠くから成城に足を運び、熱心に議論に参加して下さった皆様、そして大会を支えてくれた事務局および院生・学生に対しても、この場を借りて御礼申し上げたい。

■自由報告(1)セッションA

司会：賽漢卓娜(東京外国語大学)

報告：陳肅肅(流通経済大学)

胡源源(大阪大学)

連興檳(神戸大学)

一般自由報告Aでは陳肅肅氏の「女子労働者の利用する商業施設と地域移動体験—中国新興工業都市大連開発区を事例として」、胡源源氏の「中日国際結婚についての社会学研究—都市部における中日国際結婚への注目」、連興檳氏の「中国都市における伝統的コミュニティの変容—深圳の城中村を事例として」の3本の報告があった。

第1報告の陳肅肅氏の「女子労働者の利用する商業施設と地域移動体験—中国新興工業都市大連開発区を事例として」は、次のような内容であった。大連開発区の複合型商業施設と商場型商業施設の利用に着目することで、大連の女子労働者の消費格差がわかる。それと同時に、地域移動に焦点を絞って、地域格差と出身地戸籍変更する方法の研究は、地理的(空間的)なものとしてとらえられる。陳氏の調査によって、就学(高学歴をもつ)を目的に移動した者はより都市戸籍を取得できるのに対して、就労を目的に移動した者

は都市暫定戸籍を取得することが多いことがわかった。陳氏が価値の高い調査を綿密に行っていることは配布資料を通して理解できた。しかし、多くの内容が詰め込まれ、キーワードが多く、短時間で消化されがたいことに加えて、早朝で参加者が少なかったため、フロアから質問が若干少なかったのは残念であった。さらに整理することによってより充実した論文として期待できる。

第2報告者の胡源源氏の「中日国際結婚についての社会学研究—都市部における中日国際結婚への注目」では、都市部における「南北型」中日国際結婚をしている再婚で低学歴者の中年中国人女性と老年低収入の日本人男性に対する聞き取り調査を通し、国際結婚は日本人男性にとって、家事労働者、介護者を得る機能を持ち、女性にとっては海外就労の機会、子どものための教育費、養育費を捻出する機会を意味することがわかった。フロアからは「南北型」「文化交流型」の分類の基準や、女性の在留資格、国籍、年金の有無の質問があった。胡氏の調査は、女性は国際結婚を通して再生産労働に従事していく国際移動の一類型を提示しており、興味深い研究であった。

第3報告者の連興楨氏の「中国都市における伝統的コミュニティの変容—深圳の城中村を事例として」では、深圳は農村から城中村へ、さらに都市社区へと転換する過程において、裕福になった村民（本地人）は土地への崇拜が弱まり、祠堂文化が衰退するのに対し、移住者（主に潮州人）は自らの民間信仰を移住地にある廟で継続していることがわかった。フロアからは、経済発展と宗教崇拜の減退との関係や、廟の運営、経費、村民との関係や、シャーマニズム的な要素の有無などの質問があった。連氏の発表は、急激な都市化の潮流の中で発生している現象を、農

村コミュニティにおける変容と、移動、新移民との関係など複雑な状況を信仰というキーワードを通じて丁寧に緻密に分析し、フロアからも高い評価を受けていた。

本自由報告における3本の報告は、急速に変容する現在の中国をめぐる国内、国際移動にかかわる内容であり、そこからは、移動による垂直移動や、移動による伝統文化の変容が読み取れる。3人の報告者による堅実なフィールドワークに基づいた分析は高く評価できる。

本セッションは、朝9時よりスタートしたことで、当初は参加者も少数であったが、その後、参加者も増え議論も活発になったことは幸いであった。

文責：賽漢卓娜

■自由報告（1）セッションB

司会：細萱 伸子（上智大学）

報告：郭 莉莉（北海道大学）

劉 楠（お茶の水女子大学）

李 尚波（桜美林大学）

セッションBでは、郭莉莉会員「中国都市部の少子化と子育て支援ネットワーク—北京調査を事例に」、劉楠会員「家庭内における父親の養育行動と青年期の子供の学業達成—中国山西省の固定給有層と固定給無層の比較から—」、李尚波会員「中国における競争メカニズム導入の必要性—高等教育構造の視点から」の3報告が行われた。三報告を通じて、中国のさまざまな社会的場面における変化の現実を、丁寧な調査によってとらえようとする各報告と会場参加者との間で活発な議論が交わされた。

郭報告では、少子化が進む北京の大都市地域で、子育て支援の状況が伝統的な性質を変化させつつあることを中心に、支援ネットワ

ークの原則について議論された。中国の伝統ともいえる私的（家族）支援から離れ、家族規模の縮小、経済的余裕やニーズにより、民間の支援を補ったり、あるいは公的なサポートを期待したりするというように、支援への期待も多様化する状況が報告された。フロアからも情報の共有や解釈の可能性についてコメントや質問が行われた。

劉報告では、山西省における大規模調査から子どもの学業達成に対する親の収入の状況、すなわち固定給の有無の影響を検討した。その結果、親の収入によって、子どもの自尊心と学業達成の関係に相違がみられること、とくに父親の関与が母親への影響を通じて子どもへの好影響を及ぼす可能性が高いことが指摘された。一方で、サンプルの分類方法等の技術的側面に関して質問がなされ、今後は質的調査を通じてフォローアップが目指されているとの回答があった。

李報告では、中国高等教育における、伝統的ソ連型の教育体制について整理し、そのうえで、現代の高等教育における競争メカニズムへの志向が生み出された背景と現状、とくに国家が従来からの指導的立場を保持しながらも国際的な競争の強化や効率的な資源配分の必要性から、教育機関の自主性を重視せざるを得ない状況にあることを指摘した。現状は萌芽的な状況にあるものの、高度産業化を目指す国家とそのニーズにこたえるための学生の職業能力の向上ニーズを中心に、国家、大学、学生の相互関係が変化しつつあると指摘した。フロアからは中国の教育における競争メカニズムについての概念規定を精緻化と、中国における教育体制の変動をよりの確に表現することへの期待が述べられた。

文責：細萱 伸子

司会：根橋 正一（流通経済大学）

報告：華 京硯（龍谷大学）

池本 淳一（早稲田大学）

陳 宝強（西南大学）

宮内 紀靖（瀋陽師範大学）

朝一番のセッションで聴衆もわずかな中でスタートした。

第1は、華京硯先生（龍谷大学社会学研究科）「満鉄の日本人経営漢字新聞とその経営者について—『盛京時報』社長佐原篤介の新聞経営を中心に—」と題する発表であった。パワーポイントを用いた発表の内容はよく整理されており、研究目的、研究の背景、先行研究、研究課題、研究方法と続く明確のものであった。満州時代の新聞に関する研究がいくつかあるものの、日本語新聞に関する研究が中心で、漢字新聞やその経営者への着目は見当たらないという中で行われた挑戦的な研究であり、佐原篤介という人物と彼の登場によっておこるスタッフや紙面の変化に関する研究である。丹念な資料調査、特に新聞紙面の分析はいくつかの点で価値がある研究でいえよう。今後研究の広がりも期待される。報告者は「今後の展望と課題」という項で、「佐原は当時の漢字新聞経営の日本人新聞人を代表するものではない」と総括し、他の流れをくむ人物への着目や新聞人としての日本人と中国人とのかかわりに関する研究を示唆した。

報告に関する質問・討論では、日本人経営者の登場によって紙面改革とともに出現したであろう新聞の主張の変化の有無および変化の方向性について話題になった。また、外務省や関東軍との支援やそのほかの関係について質問があり討論が行われた。

第2の報告は、池本淳一先生（早稲田大学スポーツ科学学術院）、陳宝強先生（西南大

■自由報告（1）セッションC

学体育学院)の「現代中国におけるスポーツと社会階層—各種体育系学校の比較調査を通じて—」であった。現代中国における階層と階層移動に関してスポーツ・スポーツ学校との関係を問題意識として行われた調査に基づいた報告で興味深い発表であった。報告によれば、近年各都市で「武術学校」が急増しており、農村部からの多くの児童が転入学しているという。報告者たちは重慶市と上海市の武術学校、体育学校、芸術学校、普通学校において質問し調査を実施した。結果、武術学校などに転入学したのは都市から農村へ移動してきた「流動児童」が多いことが明らかになった。諸知見から、「武術学校への転入学が、都市の農村戸籍者に対する社会的排除および地域間格差によって生じていることを指摘し」結論としている。

報告に関心を持った会場からいくつもの質問や討論が行われた。武術学校の状況や民工学校とのかわりについて、アスリート養成の学校との関係について、また二世代にわたる階層上昇戦略として武術が選ばれた理由、卒業後の進路について等興味深い議論がなされた。

第3の報告は、宮内紀靖先生(瀋陽師範学院)の『毛沢東・鄧小平・江沢民』は皇帝か—政策・統治・権力・世襲・祭祀等の皇帝制度から—であった。長く中国社会論の研究を続けてこられた宮内先生であるが、今回は共産党政権になってからの有力な3人の指導者が「皇帝」であったか否について、政策・統治・名位制度・祭祀・世襲といった視点から研究されたものである。

幾人かからの質問と討論があった。彼らが「皇帝である」ことがわかったら、このあと中国はどこに向かっていくのだろうか?中国の革命(易姓革命)と西洋の革命(revolution)との違いはどこにあるのかに

関する研究は、中国の特殊性の研究 Chinesenessの研究にもつながっていくのではないかといった討論があった。

スタート時点では少なかった聴衆も、時間とともに増加して報告も質疑討論も活発で、興味深いセッションになった。参加された皆さんに感謝いたします。

文責:根橋 正一

■一般報告(2)セッションD(科研セッション)

司会:陳 立行(関西学院大学)

報告:首藤 明和(兵庫教育大学)

石井 健一(筑波大学)

コメンテーター:櫻井義秀(北海道大学)

学会大会は、会員のチームによる研究活動を支援するために、一般報告に科研セッションを設け、科研費研究チームごとに中間結果を報告し、研究の最終成果を高めることを図っている。

本大会では首藤明和会員「現代中国の「家族問題」—「家族圏」を通じた現状と課題の考察」、石井健一会員「韓国と台湾の対日観・外国イメージの比較」の2本の報告があった。二人の報告に対して、櫻井義秀会員からコメントがなされ、フロアから質疑を含め、活発な議論が行われた。

首藤会員は費孝通先生の「差序格局」の理論を踏まえ、「父系」、「母系」、「自己を中心とした」、「社会圈子」の概念を用いて、現代中国社会における家族圏の実態を報告した。特に、女性の「社会圈子」の変容に着目した。これに対してフロアから女性の「親密圏」と今後の運動との関連について、活発な議論がなされた。

石井会員は Fiske の二次元の理論を踏まえ、データを用いて量的分析によって、韓国

と台湾の対日感情の比較研究の結果を報告した。韓国と台湾とはともに、日本の植民地の歴史を持ち、冷戦によるアメリカの西側陣営に入り、現在民主主義の政治体制を実施していることが非常に似ているが、対日感情には大きな差が見られると報告された。これに対してフロアから、台湾の親日観が国民党支配に対する不満と関連するか議論された。

2本の報告のテーマは大きく異なるように見えるが、このセッションの報告と議論を聞きながら、筆者にとって、実に共通した問題が提起されたと思った。つまり、東アジア社会における「差序格局」や「XX 圏」の思考様式は家族という血縁集団から、民族、国家に広く展開しているため、小さい「圏」の中における政治的相互作用は大きな「圏」に影響を与えるのではないか。そのため、東アジア社会においては、市民社会への移行も、民族紛争や、国家関係などの問題の解決も、「圏」の境界に対する認識の変化は何より重要だと痛感した。

文責 陳立行

■自由報告 (2) セッション E

司会：李 妍焱

報告： 張 灝方 (香港大学)

劉 念 (神戸大学)

本セッションは当初3名の発表者を予定していたが、二番目の発表者が体調不良で欠席したため、以下2本の報告が行われた。

“Making Creators: an Anthropological Perspective from a Production Company in Japan”張灝方 (香港大学)、「中国都市部における養老施設入居者の生活と福祉——西安市での調査を事例に」劉念 (神戸大学)。

1番目の報告は「日本ではクリエイターが職場でどのように養成されているのか」につ

いて、「印象としてのクリエイター」「労働者としてのクリエイター」「資源としてのクリエイター」という3つの視点から紹介した。参与観察に基づいた報告はリアリティを克明に描き出しているが、より深みのある問題意識への展開が今後期待される。

2番目の報告は富裕層、中間層、貧困層にそれぞれ対応した西安市の養老施設についての調査結果に基づき、施設間の格差は古い格差に新しい格差が加わってできたものであり、貧困層に手厚い施設の整備と拡充が必要だけでなく、「富の再配分」を政府が積極的に行うべきだと主張した。「地域性」や「政府以外の力」への注目も必要なのではないかと、会場から問題提起があった。

文責 李 妍焱

■大会シンポジウム (2)

「Chineseness の『発明』」

発表者：于 曉妮 (神戸大学大学院)

池本 淳一 (早稲田大学)

王 向華 (香港大学)

司会：根橋 正一 (流通経済大学)

浅野 慎一 (神戸大学)

コメンテーター：

石井 健一 (筑波大学)

南 誠 (長崎大学)

“Chineseness”は、過去数年間の大会シンポジウムでつねに提起され、しかし十分に深めきれないまま積み残されてきたテーマである。“Chineseness”は、果たして存在するのか。またそれを発明したのは誰か。“Chineseness”は、世界システムやオリエンタリズム、近現代等によって構築

されただけでなく、逆にそれらを構築し返してきた側面はあるのか。そして“Chineseness”は、現代中国社会・世界社会にいかなる意義・陰影をもたらしているのか。

本シンポジウムでは、于曉妮会員「近代中国における商業印刷物：月份牌の生成と展開」、池本淳一会員「国家主導のチャイニーズネス形成とその困難：民国期の武術団体・中央国術館を事例に」、そして王向華会員「The Invention of Chineseness or The Inventiveness of Chineseness : A critique of the critique of essentialized Chineseness」の3本の報告があった。また石井健一・南誠両会員からコメントがなされた。さらにフロアからの質疑も含め、活発な議論が展開された。

すべての論点・議論を網羅的に紹介することは、筆者の能力を越える。ただし、今回のシンポジウムで特徴的だったことは、発言者の多くが、外部のまなざしによって一方的に定義されず、新たな何かを生み出そうとする当事者の苦闘を重視し、しかもその苦闘の理論的意義を確定しようと模索していた点にあるように思われる。そしてこれは、1970年代以降、半ば「常識」化され、一世を風靡してきた構築主義の観点に対し、再び巨大なパラダイム転換を迫る可能性を示唆した模索である。もとよりそれは本質主義への単なる回帰ではない。まさに王会員の報告タイトルが、その内実を見事に表現している。

于会員が報告した月份牌、および池本会員が対象とした武術は、あまりにも見事な

対称を成していた。キーワードを列挙すれば、月份牌のそれは西欧化・都市（上海）・女性・文化・市場、これに対して武術のそれは反西欧・農村・男性・国民・国家である。これほどまでに対称的な両者が、ともに近代の中国で創造され、しかもともに「中国的なるもの」とは認められなかった。それらが「中国的なるもの」として発明されたのは、1980年代以降であった。グローバリゼーション・改革開放下の中国は、これほどまでに対称的な素材を、あっさりと「中国的なるもの」として統合した。その秘密を説き明かしたのが王会員である。「時と場合によって、自分の必要と都合に応じて自由自在に作り上げるもの、それが“Chineseness”である。だからそれは永遠に変わり続ける」。于会員も池本会員も、そして王会員も、近代の絵師や武術家、そして現代の研究者自身の必死の苦闘・主体性をもつ意味の重要性を強調した。

こうした議論を聞きながら、筆者は改めて“Chineseness”が固有の民族文化ではなく、人間の文明であると実感した。文明とは、人間が生きるために必要な合理的・主体的な実践である。植民地支配の上に成立した西欧文明との苦闘の渦中で、中国の地に生み出された人間の合理的実践（“Chineseness”）は、それが決して「中国に固有の文化」ではないがゆえに、重要な意義をもっている。おりしも矢澤修次郎先生の本大会記念講演タイトルは、「文明の社会学からみた日本と中国」であった。単なる偶然とはいえない。

文責：浅野慎一(大会担当理事)

ンパクトの日中比較—リスク・信頼・モダニティと 21 世紀東アジア社会の行方—」2013. 3. 23-24 筑波大学東京キャンパス

■第 34 回総会報告

事務局 (南裕子)

開催日：2013 年 6 月 1 日 (土)

場所：成城大学

中村圭会員が議長に選出され、議事に入りました。

9. 若手萌芽研究会 2012. 9. 15 (名古屋大学)、2012. 12. 15 (一橋大学)

第 1 号議案 2012 年度事業報告

以下の各項目について、事務局および各担当理事より報告がなされました。

1. 研究大会の開催 2012. 6. 2～6. 3 (立命館大学)
2. 機関誌編集委員会報告 機関誌『日中社会学研究』第 20 号編集発行 (2012. 12、300 部)、第 21 号編集、投稿規定改定 (第 21 号より適用)
3. 『21 世紀東アジア社会学』第 5 号の編集発行
4. 「ニューズレター」発行 3 回 66 号～68 号 2012. 11 2013. 3 2013. 5
5. 理事会および拡大理事会開催 3 回 2011. 6. 2 6. 3 (拡大理事会) 6. 30 (拡大理事会) (ネットによる持ち回り理事会 13 回)
6. ホームページ、メーリングリストの運営
7. 会員概況 入会 14 名、退会 4 名
現会員 264 名 (一般 135, 学生 89, 在外国 40)
8. 研究委員会報告
シンポジウム開催 (日中社会学会・北京日本学研究中心共催、国際交流基金知的交流会議助成プログラム)「グローバリゼーション・イ

第 2 号議案 2012 年度決算報告 (資料 1)

会計担当理事より、以下の資料にもとづき、

I. 一般会計報告、II. 第 24 回大会・第 33 回総会特別会計について、報告がなされました (備考については略してあります)。

I 一般会計報告

収入総額	964, 378
支出総額	535, 811
差し引き残額 (次年度繰越金)	428, 567

※残額内訳

郵便局定期預金	0
郵便振替口座	0
郵便局普通口座	413, 461
現金	15, 106

収入の部

費目	予算額	決算額	増減額
前年度繰越金			
	161, 286	161, 286	0
会費収入			
	700, 000	793, 000	93, 000
機関誌販売			
	20, 000	10, 000	▲ 10, 000
雑収入	500	92	▲ 408
合計	881, 786	964, 378	82, 592

支出の部

費目	予算額	決算額	残額
----	-----	-----	----

機関誌制作費	450,000	462,380	▲ 12,380
21世紀東アジア社会学制作費			
	10,000	0	10,000
社会学系コンソーシアム年会費			
	10,000	10,000	0
学会ニュース経費			
	5,000	0	5,000
事業費	10,000	0	10,000
事務費	30,000	9,514	20,486
通信費	75,000	51,230	23,770
会議費	40,000	2,687	37,313
大会補助	50,000	0	50,000
予備費	201,786	0	201,786
合計	881,786	535,811	345,975

II 第24回大会・第33回総会特別会計

日時：2012年6月2日・3日

会場：立命館大学

大会会計担当者：文 楚雄

収入総額	234,120
<u>支出総額</u>	<u>234,120</u>
残額	0

収入の部

大会参加費	69,000
懇親会費	90,500
弁当代	12,000
<u>大会補助</u>	<u>62,620</u>
合計	234,120

支出の部

運営費・事務費・茶菓	15,530
会場使用料・設営費	42,220
弁当代	12,000
懇親会費	114,370
<u>謝金(手伝い学生)</u>	<u>50000</u>
合計	234,120

上記の通り報告申し上げます。

2013年5月16日

日中社会学会事務局 会計担当理事 江口
伸吾◎

第3号議案 2012年度監査報告(資料2)

監査より、以下の通り、監査結果について報告がなされました。

2012年度監査報告

帳簿、預金証書、支出証拠書などを監査した結果、いずれも適正に処理されていたことを報告します。

2013年5月22日

監査 鍾家新◎

首藤明和◎

決算報告および会計監査報告を受け、2012年度決算が賛成多数で承認されました。

第4号議案 2013年度事業計画案

以下の各項目について、事務局および各担当理事より事業計画案の説明がなされました。質疑応答を経て、賛成多数により承認されました。

1. 研究大会の開催：成城大学にて開催
2. 機関誌『日中社会学研究』：第21号編集発行，第22号編集
3. 『21世紀東アジア社会学』：第6号編集発行
4. 「ニューズレター」発行：3回
5. 研究会開催：2～3回、若手萌芽研究会1～2回
6. 理事会開催：2～3回
7. ホームページ、メーリングリストの

運営：コンテンツ充実、

8. 研究活動の一層の充実

- ①海外研究者とのネットワーク構築
(中国在住会員とのネットワーク強化等)
- ②高大連携
- ③社会学系コンソーシアムへの協力
- ④海外でのシンポジウムの開催

9. 海外からの会費納入方法の検討と導入

第5号議案 2013年度予算案

事務局から説明がなされ、質疑応答を経て賛成多数で承認されました。

収入の部

費目	予算額	(参考) 前年度予算
前年度繰越金	428,567	161,286
会費収入	750,000	700,000
機関誌販売	10,000	20,000
雑収入	500	500
合計	1,189,067	881,786

支出の部

費目	予算額	(参考) 前年度予算
機関誌制作費	450,000	450,000
21世紀東アジア社会学制作費	30,000	10,000
社会学系コンソーシアム年会費	10,000	10,000
学会ニュース経費	3,000	5,000
事業費	30,000	10,000
事務費	30,000	30,000
通信費	75,000	75,000
会議費	40,000	40,000
大会補助	50,000	50,000
予備費	471,067	201,786
合計	1,189,067	881,786

第6号議案 理事、監査、会長の承認

日中社会学会会則および日中社会学会役員選出規程に基づいて、(1)理事、(2)監査、(3)会長、推薦枠理事の順に審議がなされました。

(1) 理事の承認について

原案として以下の10名が示され、賛成多数で承認されました(会則第8条、選出規程第2条)。(以下、すべて敬称略)

北海道	0名	
東北	0名	
関東	3名	池本淳一、李妍焱 南 裕子
中部	4名	黒田由彦、鈴木未来、 唐燕霞、松木孝文、
関西	1名	首藤明和
中四国	1名	中村則弘
九州沖縄	1名	南 誠

(2) 監査の承認について

原案として以下2名が示され、賛成多数で承認されました(会則第8条、選出規定第4条)。

西原和久、陳立行

(3) 会長、推薦枠理事の承認について

総会を休会としている間に、(1)で承認を受けた新理事会が開催されました。

その結果、首藤明和理事を会長に推挙する旨が、再開後の総会に報告され、賛成多数で承認されました(会則第8条、選出規程第3条)。

また、新理事会により以下の5名を選出規程第2条により理事として推挙することが報告され、賛成多数で承認されました。

大上博右、賽漢卓娜、坂部晶子、櫻井義秀、滝田豪

第 7 号議案 次年度大会・総会の開催地・開催校について

大同大学に打診中であることが報告されました。

■理事会報告（1）

日時：2013年6月1日（土）11：00～

場所：成城大学

出席者（順不同、敬称略）：浅野慎一、池本淳一、石井健一、江口伸吾、鈴木未来、陳立行、Dixon Wang、西原和久、李妍焱、南裕子（記録）

報告事項：

（1） 役員選挙結果について
選挙により、下記の会員が理事（10名）、監査（2名）に当選、総会で承認を得る（以下敬称略）。

理事：

池本淳一、黒田由彦、首藤明和、鈴木未来、唐 燕霞、中村則弘、松木孝文、南 誠、南 裕子、李 妍焱

会計監査：

陳立行、西原和久

（2） 国際交流基金助成金事業 事業計画の変更を余儀なくされたものの3月に終了。

（3） 2014年ISA関連
・＜学会からの発信＞を中村則弘前会長に執筆をお願いし、社会学系コンソーシアムに提出した。
・sessionへの申請結果は不採択であった。

審議事項：

（1） 第34回総会議案について
事務局原案通り総会で審議を行う。

（2） 退会の承認
水原清香、李東輝

（3） 次期理事会への申し送り事項（各担当委員より発言）

■理事会報告（2）

日時：2013年6月2日（日）12:15～13:20

場所：成城大学

出席者（50音順）：池本淳一、賽漢卓娜、坂部晶子、櫻井義秀、首藤明和、鈴木未来、中村則弘、李妍焱、松木孝文（記録）、南誠、南裕子

議事内容

1. 新理事の紹介、担当

首藤明和（兵庫教育大学）：会長、池本淳一（早稲田大学）：研究・ニューズレター編集、賽漢卓娜（東京外国語大学）：庶務・ニューズレター編集、黒田由彦（名古屋大学）：『日中社会学研究』編集、中村則弘（愛媛大学）：『日中社会学研究』編集委員長、李 妍焱（駒沢大学）：『日中社会学研究』編集、坂部晶子（名古屋大学）：大会、唐 燕霞（愛知大学）：大会、櫻井義秀（北海道大学）：研究（東アジア）、滝田 豪（京都産業大学）：研究（台湾）、大上博右（兵庫県立神戸甲北高等学校）：研究（高大連携）、鈴木未来（新潟医療福祉大学）：会計・名簿、松木孝文（大同大学）：HP・ML担当、南 誠（長崎大学）：庶務・『21世紀東アジア社会学』編集担当、南 裕子（一橋大学）：事務局長

2. 新会長の所信表明

全体としての方針

・中長期の課題に取り組むことを検討している。

- ・会員の報告の場をなるべく多く設ける。
- ・若手・学生には声をかけて発表の機会を与える。
- ・指導教員は学生に声をかけ、年報への執筆を指導できるように。
- ・年配の先生方には次の世代に伝えたいことを伝えられるように。
- ・すべての世代のニーズにこたえる学会を目指す。

3. 学会運営の現状と課題について

- ・事務局長より、前理事会からの申し送り事項、問題提起を中心に報告。課題について意見交換。

3.1 会費納入問題について

- ・団体の資格で Paypal が利用できるか確認する。
- ・長期会費未納者の取り扱い（退会処分までのプロセス）。

3.2 会員拡大について

- ・企業や研究所、社会学以外の領域の会員の拡大を検討。
- ・入会手続きの簡素化（書類送付からネット上で手続きの可能性を検討）

3.3 『日中社会学研究』に関する諸問題

- ・使用言語、質の向上（査読にかかわる問題）、電子ジャーナル化、サイズ等について議論。

3.4 前期理事会で未着手または不十分な展開に終わった中長期計画

- ・高大連携については、すでに大上理事よりプログラム案を 2012 年秋に受領していたが、具体化できなかった。

3.5 若手萌芽研究会の活性化

- ・好評ではあるものの、参加者が少なく、盛り上がり欠ける。今後、活性化のため、積極的に院生等に声を掛けることとする。

3.6 会員名簿の発行

- ・会員の研究動向を情報共有し、シンポジウム等の研究企画に活用することを目指す。

3.7 ネット理事会に関わる規定の未整備

- ・どのくらいの期間で行うか、何割の賛成で可決とするかなど、会則・内規を整備することとする。

4. 年間スケジュール（案）の説明

- ・事務局長より年間スケジュールについて説明。

5. 各担当理事よりこれからの抱負

6. その他

- ・『日中社会学研究』の出版時期を、今後大会に間に合うように調整することを検討することとする。→方針を承認。但し開始時期については、編集委員会内でまず検討する。

■ 第 4 回若手萌芽研究会発表者報告

胡 源源（大阪大学）

9 月 22 日に関西学院大学梅田キャンパスにて開催された日中社会学会若手萌芽研究会で報告させていただきました。報告のタイトルは「日本都市部における中日国際結婚——中国人妻への考察を中心に」としました。今回の報告は日本の都市部における中日国際結婚家族のあり方を考察することを目的としており、大阪府周辺の都市部に在住している中国人妻への聞き取り調査を通して、国際移動のプロセスにおける中国人妻像および結婚後の生活状況を分析しました。報告後の質疑では、データの扱いについてのご指摘、最先端研究の関連文献の情報、そして、フィールドワークの際に倫理問題の注意などのアドバイスを多大に頂きました。

報告は質疑応答合わせて一時間半と、学会

報告よりかなり長かったのですが、これで終わりという時には、もう少し伸ばしてもらいたいとさえ感じました。今後の研究や調査に対して、多くの情報をいただき、大変勉強になりました。貴重な報告チャンスを設けてくれましてどうもありがとうございます。参加者の皆様と研究会の手配をしてくださった首藤会長、池本先生、南先生に深く感謝申し上げます。

■ 在中会員レポート

蘭州の思い出

蘭州理工大学（外教） 伊藤麻沙子

日中社会学会のみなさま、こんにちは。蘭州に滞在中の伊藤です。今、蘭州は昼と夜の長さがちょうど半分くらいです（朝7時頃に明るくなって、夜8時頃に暗くなる）。今年の蘭州は例年に比べて、雨の日が多いように感じます。

夏休みに日本に一時帰国し、蘭州に帰ってくる時、まず成田－北京間の飛行機に乗りますが、機内には中国の方をはじめ、いろんな国の乗客でいっぱい国際色豊かです。隣席の人と気軽に話すこともありません。これが一転、北京－蘭州間の飛行機に乗った瞬間に、「あ～、蘭州に帰ってきたんだなあ」と感じます。乗客のほとんどは蘭州人で、自分の座席に座ったとたんに、見知らぬ隣席の人や前後の席の人と大声で楽しげに話し始めます。飛行機に乗っているのに、まるで中国の列車に乗っているような感じです。こういう光景に安堵感を感じるようになった私の蘭州生活も残すところ約半年となりました。今回の在中通信は、蘭州の思い出について通信したいと思います。

私はもともと中国研究を専門としているわけではなかったのですが、2010年3月に蘭州

に来たばかりの頃は、中国のことも普通の日本人が知っている程度のことしか知らず、蘭州のことに至っては何も分からない状態で、中国語も話せませんでした。約3年経った今、ようやく1人でバスに乗って買い物に出かけ、ヘタクソな中国語と愛嬌で店主に値切ってみたり、タクシーに乗って、運転手さんと他愛もない話をしたり、蘭州人だけが知っている（ちょっと小汚い？）おいしい定食屋や茶館に行ったり、麻辣燙や牛肉面に唐辛子を追加して食べることができるようになりました。

蘭州市は中国の甘粛省（西北地域）にあり、中国では開発後進地域と言われていますが、今、すさまじい勢いで都市開発が進んでいます。1か月くらい、街に出なければ、もう別の高層ビルが建設中ですし、古いビルやお店の建て直しもあちこちで行われています。最も変化が著しいのは空港周辺です。蘭州の中川空港は市内から車で約1時間のところにあります。3年前、空港周辺には数十軒の小さな食堂やホテルが散在する程度で、乾燥土の塊だらけの荒涼とした大地が果てしなく広がっていただけでした。それが今や「蘭州新区」となり、舗装道路が縦横無尽に整備され、大きなマンションがいくつも建設中です。これらが一段落すれば、今度はショッピングセンターや諸企業などの建設に着手することになると思います。数年後、ここを訪れたら、まるで別世界の大都市に早変わりしているに違いありません。

このような建設ラッシュに沸く空港周辺で印象的だったのは、建設を手がけている会社の名前です。その名も「太平洋建設」。中国で「太平洋」から最も遠い場所の1つともいえる乾燥地帯で、せつせと都市開発に励む「太平洋」建設に、都市化して沿岸部（ひいては環太平洋の先進諸国）の経済や生活様式

に追いつき追い越したい！という蘭州人の切なる思いを感じました(私の考えすぎだとは思いますが)。

ところで、蘭州の生活で一番気に入っていることは、洗濯物が乾く速さです。本当にマッハです。日本にいた頃は、生乾きでダンスにしまう時に何となくガッカリしてしまうことがよくありました。「室内、生乾きでもニオイがしない！」などという宣伝文句の洗濯用洗剤まで売っている日本ですが、蘭州では全くそんな心配をする必要がありません。室内に干して、普通の服であれば小1時間、ジーンズや薄手の毛布でも2~3時間もあれば十分で、カラカラに乾きます。さらにスニーカーでも半日くらい放置しておけば、見事に乾きます。私のストレス解消法の1つが洗濯なのですが、蘭州の湿度の低さは、私にとっては「乾燥の悩み」ではなく、「心の底からスカッと悩みを解消してくれる恵みの天気」です。

私の蘭州生活は蘭州理工大学に尽きます。蘭州滞在のほとんどの時間をこの大学で過ごしました。大学には2つのキャンパスがあります。市街地に近いほうが本部キャンパス(外国語学部、建築デザイン学科、材料学科など)で、遠いほうが西キャンパス(その他の工学部諸学科、経営ビジネス管理学科など)です。私は外国語学部所属なので、本部キャンパスの1号楼と総合楼で主に授業をしてきました。総合楼はそもそも理系諸学科の15階建ての建物で、外国語学部(英語学科+日本語学科、ロシア語学科は現在は在学生ゼロで、理系学科の語学選択科目の1つになっている)は6階のフロアの半分を占めているにすぎません。理工大学だけに、文系学部は肩身が狭いです。

この総合楼のてっぺんには「蘭州理工大学」という大きな電飾文字が設置されていて、

暗くなると赤く点灯します。理工大学の象徴のような建物です。そしてもう1つ、学生たちの間でしか知られていない秘密があります。最上階の男子トイレの窓から外に出ると、本部キャンパス全体や蘭州の市街地が一望できる眺望スポットになっています。気をつけなければならないのは、このベランダ(?)の中央部に理系の先生の研究室の窓があるので、そこから先生が外を眺めると、見つかって大目玉を食らうことです。そのリスクを覚悟してでも、外に出ようとする理由は、このベランダの外壁に歴代のいろんな恋人たちの「愛の誓い」や「片思いのまま卒業する学生の密かな告白」が書かれてあるからです。それを一目見ようと出て行き、スリルとささやかな感動を楽しむようです。もちろん、本当は窓から外に出てはいけなくてし落書きも禁止ですが、風雨や砂嵐で1~2年もすれば消えてしまいます。この落書きは、朝早くから夜遅くまで教室で自習を続ける学生たちのちょっとした息抜きのような気もしますし、「先生の目を盗んでちょっと悪いことをしてみる」という、大学生なのにまるで中学生のような行為にほのぼのとします。そして、1~2年もすれば自然に消えてしまうというはかなさも、卒業後はどうなるか分からない大学生の恋愛を象徴していて、なかなかよいと思います(ちょっと感傷的ですが)。

1号楼の特徴は各教室(日本の小中高のような教室)に、世界の偉人たちの諸名言や自己紹介が書かれた額縁がいくつも飾られている点です。毛沢東、アインシュタイン、エジソン、杜甫、マルクス、魯迅など多数あります。その中で私がいつも気になるのは、雷鋒という人の額縁(肖像画付き)です。他の額縁は教養のない私でも知っているくらいの有名人なのに、この人のことだけは知りませんでした。紹介文を読んでも、「中国人民

解放軍、共産党戦士として中国各地で人々を助け、21歳で亡くなった」と書かれてあるだけです。雷鋒のような経歴を持つ模範的な人民解放軍の若者はこれまでもたくさんいたのではないかと思います。それなのに、なぜ雷鋒という人が取り上げられなければならないのか、いつも疑問に思っています。毎年、各学年の学生たちに尋ねてみますが、額縁に書かれてある内容に毛が生えた程度の回答です。「小学生の頃、教科書で習いました」という答えが多いので、少年少女たちに模範を示すためのエピソードなのだと思います。しかしやはり、この疑問はいまだに自分の中でスッキリしていません。それだけに想像力が掻き立てられるので、この額縁がかけてある教室で、雷鋒の肖像画を眺めながら授業をするのが楽しみになっています。

最後に、中国に滞在するジャーナリストや一般の日本人の方たちが書いたブログや書物などを読むと、中国生活の難しさや常識では考えられない驚きなどが書かれてありますが、そういうものを読むたびに、私は本当に恵まれた3年間を過ごしたんだなあと思えます。滞在中、2度の反日デモがありましたし、何度か農村を訪ねたこともあります。何事もなく終わりましたが、中国人の先生たち・学生たち、その家族・親戚や友人の方々のご協力やさりげないフォローがあって、私の知らないところで守っていただいたからだと思います。本当に心から感謝しています。

■会員の著書紹介

若林敬子・聶海松編著 2012『中国の人口問題の年譜と統計：1949－2012年』お茶の水書房

東京農工大学教員の聶海松と申します。

編著者である若林敬子・聶海松は、独立行

政法人日本学術振興会の平成24年度科学研究費補助金、研究成果公開促進費(学術図書)を受け、御茶の水書房より『中国の人口問題の年譜と統計：1949－2012年』を刊行いたしましたので、ご案内いたします。

本書は、前半は1949年に中華人民共和国が成立しまして以降の60余年にわたる人口政策・人口動態史ならびに社会学的動向にかかわる重要事項・事実を整理しました年譜です。そして後半は人口統計を整理いたしました図表の大きさは2部構成—これに用語の解説、人口・計画出産関連法、研究機関・人材の大きく5部構成からなります。

短かな、単なる事項列記のみにおおらず、この年譜を読み込むことによって、ある程度の流れ・歴史的経緯が興味深くより正確にフォローできますようにと、若干の質的内容を加味しつつ記したものです。もちろん主観を含めず、客観的に記すことが大前提の鉄則でした。つまり本書が示す資料は、人民共和国成立以来の歴史を、長期にわたって一貫して整理し観察を加え、これまでの各種文献や統計資料に依拠もしつつ、これまでの空白をきちんと埋め、新たな知見を加えたものです。また昨今、ともすれば安易に用いられているネット検索などではとらえられない、第一次資料的価値をもつ貴重な現実を提供するとともに、今後の中国の人口社会学の再構築にとって重要な知見を示しています。

本書は、若林先生には33年間に亘って継続してきた日中間の研究協力と最新のデータを含む一人っ子政策の歴史的総括ではありますが、私・聶は、年表等の文面整理・確認、および統計資料の作図表・データ確認などに携わらせていただいたことを誇りに思っています。

目次は下記通りです。

I. 人口政策・人口動態についての年譜: 1949
-2012年

II. 人口統計基本資料

基本人口 人口センサス 歴史 ピラ
ミッド TFR (出生率) 性比 出生性比
一人っ子率・証 産児制限 寿命・死因
教育 家族 高齢化 離婚・孤児 就業
人口 都市・移動 貧困・格差 社会保
障 少数民族 上海 深セン・香港・台
湾 日中国際人口移動 国連推計 (高齢
化) (インドとの交差) (巨大都市) 文献

III. 人口・社会学関連の用語・概念・訳語の 解説

IV. 1. 中国人口・計画出産法: 2001年

2. 流動人口計画出産工作条例: 2009年

3. 上海市人口・計画出産条例: 2003年

4. 上海市の計画出産報奨・補助に関する
若干の規定: 2011年

5. 社会扶養費徴収管理弁法: 2002年

6. 中国老人権益保護法: 2012年

V. 1. こちらが訪問して研究協力していただ いた中国人口・社会学関連の主要研究 機関とその代表者及び調査研究地

2. 中国における主な人口科学研究機関
他

■ 陸学芸先生を悼む

高橋明善

中国の 同年の友 逝きしとぞ

我らが世代 運命 (さだめ) きびしく
陸師逝く 葬儀の自国 偲びつつ

我娘弾く モーツアルト聴く

中国の ホテルに陸師 訪ね来て

語りし記憶 昨日のごとし

大倉に 蘇州上海 案内の

陸先生は おおらかなりき

A R S Aをば 眼黒き間に 開きたし
努力みのりて アジア交わる

■ 陸先生と 福武先生を偲ぶ

我が家にて 盃かかげ 逝きし師を

語りし友も 冥界を去りぬ

突然に 傘寿を前に 友は逝く

今一度の 願いも空し

I S A (国際社会学会議) 中国参加の条件の
整備頼むも 歴史は移る

■ 事務局からのお知らせ

新入会員 (2013年5月~9月理事会承認分)

■ 事務局からお願い

メルマガ届いていますか?

本学会では、メーリングリストによる広報
を行っています。事務局へご登録いただいた
メールアドレスへ、「日中社会学会メールマ
ガジン」が配信されます。

登録がまだの方、また、メールアドレスに
変更のあった場合は、事務局までお知らせく
ださい。

情報をお寄せください

会員の皆様で、出版物のご案内や研究会・
シンポジウムの開催のご案内などがござい
ましたら、事務局まで情報をお寄せください。

会費納入のお願い

学会活動は皆さまからの会費で支えられ
ております。2013年度までの会費納入をお
願ひいたします。一般会員 6000円、学生会
員 4000円です。

日中社会学会・郵便口座

口座記号番号: 00140-9-161801

加入者名: 日中社会学会

*インターネットバンキング等、銀行からの
お振込みの場合は、店名：〇一九店 店番：
019 口座番号：0161801 です。

日中社会学会ニュースレター No.69

編 集：賽漢卓娜（東京外国語大学）

編集補佐：池本 淳一（早稲田大学）

発 行：日中社会学会事務局

〒186-8601 東京都国立市中2-1

一橋大学・南裕子研究室

info@japan-china-sociology.org

yminami@econ.hit-u.ac.jp

tel: 042-580-8810（研究室直通）

fax: 042-580-8799（共同研究室の
ため南宛を明記してください）

○日中社会学会・公式 HP

<http://www.japan-china-sociology.org/>

発行日：2013年12月